

「化石先生は夢を掘る

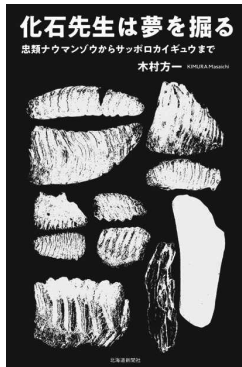
忠類ナウマンゾウからサッポロカイギュウまで」

著者：木村方一

2020年7月31日発行、A5判 143頁

1,800円（税別）、北海道新聞社。

ISBN978-4-89453-996-9



著者の木村氏は、帯広柏葉高校の教員時代に十勝団体研究会のメンバーとして地域の地史を明らかにする団体研究に取り組む中で、忠類村（現幕別町）でのナウマンゾウ化石発見に遭遇した。しかし当時の北海道には大型脊椎動物化石を発掘し、研究できる体制はなかった。そのため本州の大学に在籍する研究者を中心に発掘隊が組織され、木村氏は地元代表として発掘隊の受入など裏方の業務を担うことになった。

木村氏はこのナウマンゾウ発掘に参加した経験から、その後地元で発見されたクジラなど海棲脊椎動物化石の研究に自身の研究テーマを変えた。その後、研究環境の充実を求めて北海道教育大学札幌校へと活動の場を移したが、助手からのスタートであり経済的な後退は家族の同意を得るのに大きな障害となったようだ。

そんな中、北海道でも大型脊椎動物化石の発見が相次いだことは、木村氏にとって大きな追い風となった。木村氏は若手の化石研究者を育てる傍ら、その後道内各地で次々と発見されたほぼすべての脊椎動物化石の発掘・研究を指導してきた。本書は、木村氏のおよそ半世紀に及ぶ化石研究史をまとめたものだが、それは忠類ナウマンゾウ以降の北海道における脊椎動物化石発見史を網羅したものと言い換えることができる。

本書には、木村氏が化石の発見から研究の過程で関わった多くの人々が実名で登場し、そのことが本書に臨場感を与えている。化石の研究は、化石が発見されなければ始まらないのはもちろんだが、それに関わった多くの人の手によって成り立っているということに改めて気づかされる。この間発見された膨大な数の化

石について、木村氏がそのすべてにおいて直接研究に携わった訳ではないが、発掘を組織してその後の研究につなげる上で地元自治体との折衝や研究者のアレンジを行い「人のつながり」を創ってきたことは木村氏の大きな功績と言える。

木村氏の化石研究への情熱は、世紀の大発見とも言える化石が本州の専門家たちの手で発掘され、道外へ運ばれて研究されたという過去の現実を変え、なんとかして地元の手で発掘と研究をし、そして展示や普及活動につなげたいという思いから発している。その思いは、道内各地に化石博物館が設立され、そこに木村氏の教え子たちが学芸員となって赴任することで実を結んだ。さらにそれは、地元の人材だけで化石をクリーニングし、レプリカを作製して展示するということまで発展した。木村氏の熱い思いは、大学を退官し80歳を過ぎた今も冷めることはなく、どこかで化石が発見されれば一番に駆けつけ、地元はその化石の重要性を語り、発掘・研究の体制づくりをサポートしている。

化石の発見は、時として信じられないような物語を伴うことがある。化石マニアや研究者にとってはよく知られた有名な標本に、どんな発見のドラマが隠されていたのか、本書は学術的な関心とは別な意味の興味を湧き立たせてくれる。例えば忠類ナウマンゾウの発掘は、道路工事現場で発見された石を、たまたまそこに居合わせた測量助手の青年が、中学生時代に理科の教科書で見たゾウの歯の化石に似ていると言ったことから始まった。またサッポロカイギュウは、化石好きな小学生の女子がいつものように豊平川を散策していて不思議なものを見つけたことに端を発している。研究者でさえ、実物を見るまではよくあるサンドパイプ（巣穴化石）だろうと半信半疑だったのだ。このふたつのエピソードだけでも、化石の発見に必要なものは経験値だけではなく、若くみずみずしい感性だということがわかる。

本書は、化石大好きな子どもたちに、誰にでも大発見のチャンスはあるという大きな夢を与えてくれるに違いない。それだけでなく、各自治体の教育委員会などで化石を含む文化財行政に携わる方々、さらには一般市民の方にもぜひ読んでいただきたい1冊だ。化石が発見されると工事の進行に障害になるので見つかったことにならないうように、というような無理解をなくすためにも。

北海道の大地には、発見される日を待ち続けている化石がまだまだたくさん眠っているはずだ。いつの日かこの本の続編ができる状況になることを願っている。  
(篠原 暁)